

恭仁宮大極殿院考

奈良康正

1. はじめに

恭仁京は京都府南部に所在し、木津川市加茂町例幣に宮域を構える奈良時代の宮都である。聖武天皇により造営され、天平年間に、およそ3年間にわたり営まれた短命の宮都である。^(注1)

恭仁京の所在については、近世段階に『山州名跡志』、『山城名勝志』、『山城志』等に取り上げられており、宮域に関しては『山州名跡志』では木津川南岸の法華寺野付近に、『都名所図会』、『京師巡覧集』では鹿背山付近に比定されている。また、京城に関しては『山城志』では加茂町瓶原、加茂、山城町上狛、木津川市木津付近と想定している。

宮域に関する実証的な調査・研究の嚆矢は、明治32年に刊行された『恭仁京志』であり、その後、木村一郎や喜田貞吉の一連の研究が発表されることとなり、加茂町瓶原に求める喜田説を軸に、木津川南岸の法華寺野に求める説や木津川市鹿背山とする説、木津川市木津と考える説が展開された。

京城に関しては、『続日本紀』天平13年9月己未条「從賀世山西路以東為左京、以西為右京。」に基づいた検討から、喜田は「瓶原・加茂の2村から木津町、上狛村地方」と想定した。この他、木津付近の狭小な範囲を想定する説等も存在したが、他の都城の京城の規模が判明するにつれ、平城京と同規模の範囲を現地にいかに想定するかが課題となった。

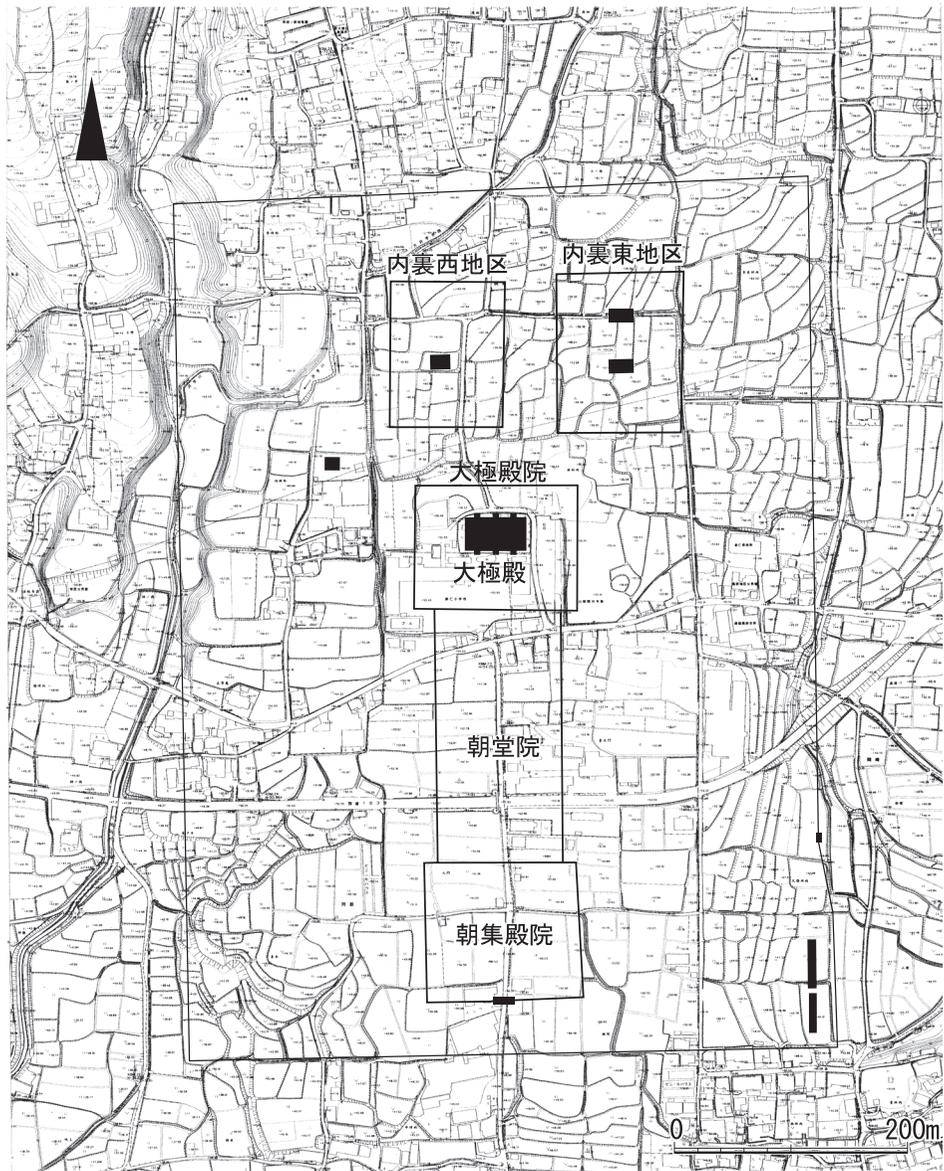
研究史上の大きな画期は、足利健亮の歴史地理学的な研究である。^(注2) 航空写真や小字名、現地の地形観察等から

- ①瓶原に残された土壇を大極殿基壇とし、北に内裏、南に朝堂院を想定
- ②平城宮を参考にこれらを含む1 km四方を宮域として提示
- ③京城は南北九条、東西八坊の平城京プランを基本に計画され、変則的に鹿背山を中心に、東に開ける盆地が左京城、西に広がる平地が右京城と宮・京城の復原案を提示した。

この研究成果が、京都府教育委員会が恭仁宮跡での発掘調査を実施する際の大きな指針となり、昭和48年度から調査に着手することとなる。その後、平成8年度に宮の四至が確定することとなるが、足利の想定とは異なり、南北750m、東西560mと平城宮の1/3規模

となることが判明した。そのため、この狭小な宮域に主要施設をどのように配置するかが新たな問題として提議されることとなり、引き続き、内裏地区、大極殿院地区、朝堂院地区等の宮中枢部の実態を解明すべく発掘調査が継続的に実施されている。

大極殿北側に所在する内裏地区に関しては、東西に並んだ二つの区画の存在が判明した。この二つの区画についてはその性格が判然としないため、それぞれ「内裏西地区」・「内裏



第1図 恭仁宮跡全域図

東地区」と呼称し区別している。「内裏西地区」は、掘立柱塀により東西330尺^(注3)、南北430尺に区画されていることが判明した。一方、「内裏東地区」は、東・西・南の3辺を築地塀、北辺を掘立柱塀で区画することが判明し、東西370尺、南北約470尺の規模に復元されている。区画中央には中心建物と見られる東西棟建物が南北に2棟並んで検出されており、その在り方は平城宮内裏の歴史的展開の系譜上^(注4)にあるとされている。

このように、二つの区画は圍繞施設の規模・構造を異にしており、また、内部の調査が十分に実施されたとはいえない状況ながら、建物群の配置についてもその様相が大きく異なることが指摘されている。この差異が各々の区画の性格を如実に示していると考え、その考察に関しては稿を改めることとしたい。

朝堂院地区では、現在、範囲内容確認調査を実施中である。朝堂等の検出には到っていないが、周囲を掘立柱塀で区画し、東西幅は400尺で造営されていたことが確認されている。また、朝堂院の南側には朝集殿院が設けられており、南に開く朝集殿院南門が検出されている。東辺が北で西へ振れることにより、東南隅部が鋭角を示しているが、造営規模は東西450尺、南北420尺と推定される。

大極殿院地区では、主に大極殿基壇を中心に調査が実施されており、大極殿の規模が確定している。大極殿院回廊に関連する成果は得られていなかったが、近年実施された同地区の調査により、回廊に関わる遺構が検出され、その構造を検討する資料が得られつつある。

本稿では、未だ十分な資料が得られたとは言えないが、それらの成果に基づき大極殿院の復元を試みることとしたい。

2. 大極殿院地区の調査

大極殿は中国の都城に存在した「太極殿」に由来し、三国時代の魏に初見が認められる。皇帝が公的儀式を行う中心の殿舎であり、皇帝の居住空間である。後に公的儀式の場へ性格を純化させた施設である。日本における大極殿院は、大極殿を中心とする天皇の公的な占有空間であり、その前庭と、四周をめぐる回廊及び南北に開く門からなるとされる^(注5)。

日本における文献上での「大極殿」の初見は、『日本書紀』に記述された飛鳥板蓋宮において^(注6)であるが、これは編纂者潤色の可能性が早くから指摘されていた。次に天武紀に見られる飛鳥浄御原宮の大極殿に関しては、福山敏男はその成立がほぼ推定できるとした^(注7)。しかし、飛鳥地域における宮都や前期難波宮の発掘成果を踏まえ、大極殿とその一郭の構造や機能などの検討から、直木孝次郎^(注8)や鬼頭清明^(注9)は大極殿の成立は藤原宮との見解を示し、今泉隆雄^(注10)や橋本義則^(注11)、寺崎保広^(注12)も同様に藤原宮での成立を認めている。また、積山洋は、

内裏における公私の区別の顕在化、即位儀・元日朝賀の実施という点を評価し、難波長柄豊碕宮(前期難波宮)の内裏で大極殿はその歩みを開始し、藤原宮で完成に至ったと述べている。^(注13)一方、小澤毅や、林部均は飛鳥宮Ⅲ-B期の飛鳥浄御原宮において、新たに造営されたエビノコ郭の成立によって「大極殿」は成立したとの見解を示している。^(注14)また、小澤毅は、平面規模の詳細な検討をとおして、藤原宮大極殿は平城宮中央区に移建されたと結論づけた。^(注15)恭仁宮大極殿は、平城宮を経て藤原宮から移築された建造物である。

恭仁宮における大極殿の在り方について、『続日本紀』に記載された大極殿及び大極殿院に関連する記事を見ることとしたい。

- ①天平13年正月癸未条「天皇始御恭仁宮受朝。宮垣未就、纒以帷帳。」
- ②天平13年正月戊戌条「御大極殿、賜宴百官主典已上。」
- ③天平14年正月丁未条「百官朝賀。為大極殿未成、權造四阿殿、於此受朝焉。」
- ④天平14年2月庚辰条「詔、以新京草創宮室未成。便令右大弁紀朝臣飯麻呂等饗金飲英等於大宰、自彼放還。」
- ⑤天平15年正月癸卯条「天皇御大極殿。百官朝賀。」
- ⑥天平15年12月辛卯条「初壞平城大極殿并歩廊、遷造於恭仁宮四年。於茲、其功讒畢矣。用度所費、不可勝計。至是、更造紫香樂宮。仍停恭仁宮造作焉。」
- ⑦天平18年9月戊寅条「恭仁宮大極殿施入国分寺。」

①は恭仁宮へ遷都した後、朝賀に関わる記事の初見である。大極殿は完成を見ておらず、具体的にどのような殿舎をもちいたかは不詳である。

②では、聖武天皇が大極殿に出御し臣下に宴を賜うとされている。しかし、大極殿を宴会の会場とすることは異例であり、大安殿の誤りの可能性が指摘されている。また、この前日には大射が中止されており、①と合わせ恭仁宮が未整備であったことが伺え、大極殿及び大極殿院は未だ完成に至っていないと考えられる。

③、④ともに施設の未整備を指摘する記事である。③では大極殿が未完成のため、仮設の四阿殿を設け朝賀を受けており、④では新羅使を宮には招かず大宰府で饗応したことが記されている。

⑤が恭仁宮における大極殿を利用した記事の初見であろう。この時までには平城宮から大極殿の移建が完了し、大極殿院の体裁が一定程度は整ったものと考えられる。

⑥は紫香樂宮造営の影響により恭仁宮造営を停止したとする記事である。この段階には、平城宮から大極殿と共に大極殿院の移築も完了していたものと判断される。

⑦は平城遷都に伴い、廢朝された恭仁宮大極殿が金堂として山背国分寺に施入されたことを伝える記事である。これから後、国分寺の伽藍整備により宮域の様相が大きく変貌し

ていくものと考えられる。

次に、大極殿院地区で実施された発掘調査の成果についてまとめることとしたい。

大極殿S B5100については、昭和51・52年度の2箇年にわたって基壇跡の調査が実施されており、残存礎石及び13基の礎石抜き取り痕跡などから、建物規模が判明している。桁行は9間(149尺)で、身舎が17尺等間、廂部分が15尺、梁行は4間(66尺)で、身舎が18尺等間、廂部分が15尺とされた。また、その際の調査で北西及び南西隅の2基の礎石が原位置を保つことが確認されている。基壇外装についても一部が確認されたが、他の宮で確認された凝灰岩による壇上積基壇ではなく瓦積基壇であった。これは、恭仁宮廢朝後、大極殿が国分寺に施入され、金堂とされたことに起因すると考えられ、本来の姿については不明である。

大極殿院回廊は、北・東・西辺でそれぞれ調査が実施されている。

北面回廊S A0701では、大極殿中軸線から北へ36m付近において、東西に配置された礎石抜き取り痕跡が3基にわたって検出されており、それぞれの心々間距離は約4.6mを測る。同時に、礎石抜き取り痕跡の北側に、平行する東西方向に掘削された溝1条も検出されており、幅0.7~0.9mを測るが、深さは0.1m程を残すのみである。これは回廊に伴う雨落ち溝と判断されており、溝と礎石抜き取り痕跡との心々間距離は2.1mである。この3基から南へ7m前後の地点においても、礎石抜き取り痕跡が1基検出されている。3基の礎石抜き取り痕跡、及びそれに平行する東西方向の溝は、その主軸が東でわずかに北へ振れている。

大極殿基壇の北側で実施された調査では、礎石抜き取り痕跡が5基検出されている。このうち4基は東西に配置され、それぞれの心々間距離は約5.1mを測る。これは大極殿の柱間と一致し、柱位置も大極殿と対応するとされている。もう1基は東西に配置された4基のうち、東から3基目の約4m南に位置し、大極殿正面中央階段の東辺に筋を揃えると報告されている。回廊と大極殿を接続する軒廊SX0801の一部を検出した可能性に言及している。しかし、限られた面積での成果に基づいており、現時点での評価は拙速の感があるため、今後、周辺地点の調査成果が蓄積した段階で改めて検討することとしたい。

東辺の調査では、南北に2列に並んだ柱跡が検出されている。大極殿中軸からそれぞれの柱列まではおよそ64mと69mを測り、南北の柱間は4.5m前後を測る。回廊構築に伴う足場用柱跡と推定されているが、この柱列の中間部分では回廊の痕跡等は一切確認されていない。

西面回廊S A0601の調査は、大極殿中軸から75m前後の地点で実施されており、そこでは南北に並ぶ礎石抜き取り痕跡が10基にわたり検出されている。礎石抜き取り痕跡は長軸

1.2～2.0m、短軸1.0～1.2m前後の南北を主軸とする楕円形を呈し、内部の掘削を実施したものは一部に止まるが、概ね大きく削平を受けており、良好な残存状況ではなかったようである。

各礎石抜き取り痕跡の心々間距離は、概ね4.6m前後を測るが、北端の2間分のみは約3.6mと他に比して短くなっている。これは、回廊北西隅部に係る柱間の変更に伴うと考えられ、この柱間が約3.6mと短くなる2間分の、北から3基目の東側で実施された追加調査では、約7.2mの地点で同様の礎石抜き取り痕跡1基が検出されている。

抜き取り痕跡の西側では、平行する南北方向の溝が1条検出されており、回廊に伴う雨落ち溝との判断がなされている。幅0.6～1.0mを測り、検出した範囲での総延長はおおよそ23mに及んでいる。大きく削平を受けており、残存状況は良好ではない。また、この溝の西側は緩やかな傾斜を有しつつ1.2m程高くなっている。溝と礎石抜き取り痕跡の主軸はおおよそ1.5mの距離にあり、北辺で検出された同様の遺構と比較して0.6m短いことが報告されている。また、これらの主軸は北でわずかに西へ振れている。

回廊の基壇及び築地本体については、いずれの調査においても、後世の耕作地への造成に際し大きく削平されたと考えられ、その痕跡さえ確認することができなかった。

3. 考察—大極殿院の復原—

恭仁宮大極殿院については、『続日本紀』天平15年12月辛卯条「初壞平城大極殿并歩廊、遷造於恭仁宮四年。於茲、其功讒畢矣。用度所費、不可勝計。至是、更造紫香樂宮。仍停恭仁宮造作焉。」との記述から、平城宮の大極殿及び大極殿院回廊が移築されたと推測されている。これまでに京都府教育委員会及び奈良国立文化財研究所（現独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）^(注16)によって実施された発掘調査により、平城宮中央区の大極殿S B7200が恭仁宮に移築されたことが確定している。このことから、大極殿院回廊についても、同様に移築された可能性が高いものと判断される。実際に、平城宮中央区大極殿院の調査においても、恭仁宮に都が遷る期間には、東面築地回廊S C5500が撤去され、南北塀S A3777へと大きく改変されていたことが確認されており、東面と併せて西面築地回廊も掘立柱塀に改変されたと推測されている。この改変は、恭仁宮への遷都に伴い回廊の一部が移築された結果と考えられ、同一規格の構築物が恭仁宮において造営された可能性は極めて高いと判断される。

ちなみに、平城宮中央区の大極殿院回廊は複廊形式の築地回廊とされ、桁行15.5尺、梁間12尺に復原されている。基壇巾は36尺を測り、築地基底部は巾6尺、軒出は9尺前後に復元^(注17)されている。

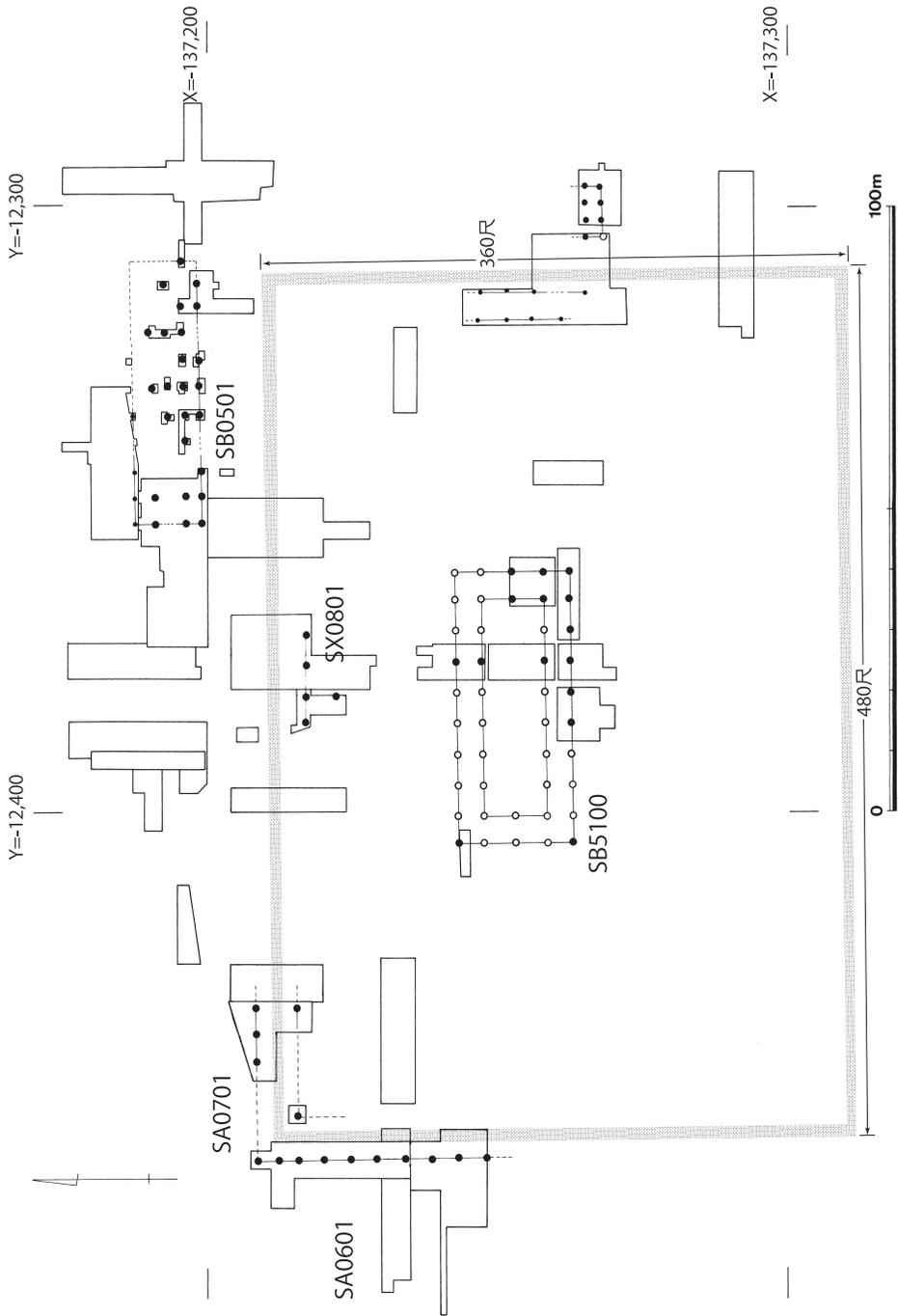
付表 回廊柱間一覧

S A 0601				S A 0701				
		X	Y			X	Y	
梁間	P101	-137,208.64	-12,457.36	梁間	P107	-137,208.38	-12,432.13	
	P101-102 心々間	3.65 (12.3)			P107-P205 心々間	7.38		
	P102	-137,212.29	-12,457.13		P205	-137,215.76	-12,432.20	
	P102-103 心々間	3.47 (11.7)			P107-P205	総延長 (m)	想定割付 (尺)	
	P103	-137,215.76	-12,457.10			7.38	3.69 (12.5)	
P101-103		総延長 (m)	想定割付 (尺)	桁行	P105	-137,208.51	-12,441.14	
		7.12	3.56 (12.0)		P105-P106 心々間		4.62 (15.6)	
桁行	P103	-137,215.76	-12,457.10		P106	-137,208.39	-12,436.52	
	P103-104 心々間	4.53 (15.3)			P106-P107 心々間		4.39 (14.8)	
	P104	-137,220.29	-12,456.89		P107	-137,208.38	-12,432.13	
	P104-105 心々間	4.71 (15.9)		P105-P107	総延長 (m)	想定割付 (尺)		
	P105	-137,225.00	-12,456.80		9.01	4.51 (15.2)		
	P105-106 心々間	4.47 (15.1)		桁行	P201	-137,215.56	-12,449.92	
	P106	-137,229.47	-12,456.92		P201-P205 心々間		17.72	
	P106-107 心々間	4.58 (15.5)			P205	-137,215.76	-12,432.20	
	P107	-137,234.05	-12,456.90	P201-P205	総延長 (m)	想定割付 (尺)		
	P107-108 心々間	4.65 (15.7)			17.72	4.43 (15.0)		
	S A 0601- S A 0701							
			X	Y			X	Y
	桁行	P108	-137,238.70	-12,456.80	梁間	P103	-137,215.76	-12,457.10
		P108-109 心々間	4.60 (15.5)			P103-P201 心々間		7.18
		P109	-137,243.30	-12,456.60		P201	-137,215.56	-12,449.92
P109-110 心々間		4.60 (15.5)		P107-P205		総延長 (m)	想定割付 (尺)	
P110		-137,247.90	-12,456.50			7.18	3.59 (12.1)	
P103-110		総延長 (m)	想定割付 (尺)					
		32.14	4.59 (15.5)					

恭仁宮大極殿院地区の調査により検出された大極殿院回廊に関連する遺構は、両側柱に伴う礎石抜き取り痕跡が15基と、北・西辺の外側を廻る雨落ち溝の二条、さらに東辺の構築に関わる足場用柱跡である。築地そのものはその痕跡を全くとどめておらず、削平により失われたものと考えられる。また、掘込地業等を施した痕跡に関しても報告はされていない。

抜き取り痕跡から厳密に礎石の位置及び柱の中心を特定することは困難な状況であるが、各遺構の検出範囲におけるそれぞれの中心座標は、付表のとおりである。

このことから、回廊の桁行は概ね15.5尺(4.58m)で割り付けられたものと判断される。また、S A 0701P107-P205間は7.38m、S A 0601P103-S A 0701P201間が7.18m、回廊北西隅部付近にあたるS A 0601P101-P103間が7.12mとなっており、若干の数値の振幅はあるものの、築地塀を中心に設けてそれぞれの梁間が12尺(3.55m)で割り付けられたものと考えられる。以上のことから、平城宮中央区の大極殿院回廊の復元と数値的にも齟齬を来しておらず、『続日本紀』の記述のとおり、大極殿と共に大極殿院回廊についても移



第3図 大極殿院想定復元図

築されたことが確定したと言える。

しかし、恭仁宮では側柱から雨落ち溝までの心々間距離が西辺では5尺、北辺では7尺となっており、9尺となる平城宮の復元数値とは異なる成果が得られた。これがいかなる要因に基づくかは不明であるが、平城宮での回廊構築から恭仁宮への移築までに30年余の経過があり、その間の経年劣化に伴う部材(飛檐垂木等)の痛みによる改作に伴うとの解釈も成り立つ。また、西辺に関しては、すぐ西側に傾斜面が迫るという地形上の制約に基づく可能性等も考慮すべきであろう。

西面回廊S A0601は南北軸が北でわずかに西へと振れており、北面回廊S A0701も東西軸が東でわずかに北へと振れている。その数値はN-1°50'-W前後と、これまでの調査で確認された大極殿や、その他の恭仁宮の主要施設の振れとも近似値を示している。山背国分寺の時期にはこの振れは解消されており、大極殿院に伴う回廊であることは確実である。

以上の成果により、大極殿院回廊の構造・規模の復元を試みると、構造は桁行15.5尺、梁間12尺を測る複廊形式の築地回廊となる。規模は、大極殿南北中軸と西面回廊西側柱とが約74.3m (252尺)の距離となり、梁間が12尺であることから、西面回廊の築地心までは心々間で240尺となる。この数値を大極殿南北中軸を中心に東側へ折り返すと、大極殿院の東西幅は480尺で設計されたものと判断される。また、北面回廊北側柱と、大極殿東西中軸まではおよそ45m (152尺)の距離となり、回廊の梁間が12尺であることから、大極殿東西中軸から北面回廊の築地心までの心々間は140尺となる。また、大極殿院閤門に関しては、平城宮の大極殿院閤門S B7801が現地に残されたため、恭仁宮では新たに築造されたと考えられる。しかし、恭仁小学校建築に伴う造成により痕跡は残存せず、南面回廊と併せて、詳細については不明である。だが、南側に開口する小学校正門付近は1m以上の比高差を持って南側より高くなっており、また、数個の礎石が近辺に据え置かれている。この地形は、校地造成以前の状況を反映したものである可能性があり、この地点に大極殿院閤門及び南面回廊が構築されていたものと想定した。この地点は大極殿中軸から約65m (220尺)を測り、このことから大極殿中軸から北面回廊までの心々間距離140尺と合わせ、大極殿院の南北規模は360尺に復元することが可能である。

平城宮から搬入された大極殿院回廊の部材は東及び西面を合わせた2160尺分と考えられる。大極殿及び大極殿院は宮の最重要施設であり、その完成は一刻を争われたものと考慮される。そうであるならば、新規の部材を調達することなく既存分のみを利用して工事が急がれたのではないかと推測される。恭仁宮での大極殿院造営には、速やかな工程管理と利用可能な資材の制約という枷がはめられていたと想像される。狭小な宮域に大極殿院をはじめとする主要施設を効率的に配置することを考慮した上で、大極殿院は東西480尺、

南北360尺という設計を選択したものと考えられる。

以上、これまでに得られた成果に基づき、恭仁宮大極殿院の復元を試みた。東西規模及び北面回廊に関しては今回の復元ではほぼ誤りはないものと考え、南辺に関しては検討すべき資料が皆無に等しく、仮説的に一案を示し得たのみである。

今後の調査の進展により、実態解明につながる成果が得られることを切に願うものである。

(なら・やすまさ＝当調査研究センター調査第2課調査員)

- 注1 恭仁宮の存続期間については、天平12年12月丁卯条「皇帝在前幸恭仁宮。始作京都矣。」から、天平16年2月庚申条「左大臣宣勅伝、今以難波宮定為皇都。」までとする。
- 注2 足利健亮「恭仁宮域の復元」『社会科学論集』4・5号合併号 1973
- 注3 恭仁宮造営における基準尺は1尺=0.296mと考えられる。
- 注4 橋本義則「日本の古代宮都－内裏の構造変遷と日本の古代権力」『記念的建造物の成立』2006
- 注5 橋本義則「朝政・朝儀の展開」『平安宮成立史の研究』1995
- 注6 『日本書紀』皇極4年6月戊申条「戊申、天皇御大極殿。古人大兄侍焉。」
- 注7 福山敏男「朝堂院概説」『大極殿の研究』1957、(「大極殿の研究朝堂院概説」『住宅建築の研究』1984再録)
- 注8 直木孝次郎「大極殿の起源についての一考察」『〈大阪市立大学〉人文研究』25 1973
- 注9 鬼頭清明「日本における大極殿の成立」『古代史論叢』1983
- 注10 今泉隆雄「第一章律令制都城の成立と展開」『古代宮都の研究』1993 内裏が公的空間としての大安殿一郭と、朝堂の正殿たる大極殿に分化し、かつて内裏前殿区で臣下を引き入れた行事は大安殿一郭で実施され、大極殿は朝堂に対する天皇出御の独自の正殿へとなる。その結果、大極殿院は臣下を召し入れない天皇の独占的空間へと変容するとした。こうした形態は藤原宮で成立したとする。しかし、後年、飛鳥京跡の調査成果に基づく林部均の見解に賛同している。
- 注11 橋本義則「第三章朝政・朝儀の展開」『平安宮成立史の研究』1995
- 注12 寺崎保広「書評林部均『古代宮都形成過程の研究』」『条里制・古代都市研究』17 2001 「大極殿とは、天皇が即位する場であり、元日の朝賀をうける時に着座する殿舎」との定義により浄御原宮「大極殿」の用例はこれと大きく異なり、未だ「天皇の独占的空間」と見ることはできないとする。
- 注13 積山洋「大極殿の成立と前期難波宮内裏前殿」『都城制研究(2)宮中樞部の形成と展開－大極殿の成立をめぐる－』2009
- 注14 小澤毅「飛鳥浄御原宮の構造」『堅田直先生古希記念論文集』1997
林部均「飛鳥宮－大極殿の成立－」『都城制研究(2)宮中樞部の形成と展開－大極殿の成立

をめぐって-』 2009

注15 小澤毅「平城宮中央区大極殿地域の建築平面について」『考古論集-潮見浩先生退官記念論集-』 1993

注16 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告XI』 1982

注17 清水重敦・清水真一・山田宏「平城宮第一次大極殿院南門・回廊の復元設計」『奈良文化財研究所紀要2004』 2004

調査報告に関しては、『埋蔵文化財調査概報（1973～2004）』、『京都府埋蔵文化財調査報告書（平成16～21年度）』、『恭仁京跡発掘調査報告Ⅱ（2000）』（京都府教育委員会）による。